

1840年代における〈夢想家〉の諸相

高橋 知之

はじめに

1840年代はロシア文学史・思想史において画期をなす時代として捉えられてきた。単純に図式化するならば、それは二つの二項対立のセットによって整理される。一つはロマン主義からリアリズムへの転換であり、もう一つは西欧派とスラヴ派の対立である。前者は、形式としては詩から散文への転換としてあった。個人的な抒情の吐露にかわって、社会的現実の描写が是とされるようになったのである。こうした動きはむろん、思想的、政治的な変化と軌を一にしていた。デカブリストの挫折後を生きた内向的な知識人たちは、40年代にいたって再び理想社会の夢にめざめた。その嚆矢となったのがベリンスキーやバクーニン、ゲルツェンといった面々である。彼らはドイツ観念論の影響を脱して、フォイエルバッハやチェシコフスキらのヘーゲル批判に共鳴し、ジョルジュ・サンドやフーリエやサン＝シモンらのユートピア社会主義に心奪われ、「現実」への実践的な参入を希求した。文学はそうした希求の表現となり、「月と憧れと乙女」をうたう詩にかわって、社会悪を暴露する「自然派」の散文が流行するようになった。一方、西欧派の論争相手となったのがスラヴ派と総称される知識人たちで、前者がヨーロッパを範としてロシアの近代化を目指したのに対し、後者はピョートル大帝の改革以前のロシアを理想とするロマン主義的な復古思想へと向かった。両派の対立ははじめから顕在化していたわけではない。専制への批判という同じ問題意識を共有しながら激しい舌戦をくりひろげるなかで、西欧派、スラヴ派として自己を形成していったのだった。

40年代の文学は概ね、このような構図のもとに配置されてきた。とはいえ、これはあくまで図式的な整理というにすぎない。たとえば、一口に西欧派といっても、宗教の問題をめぐるゲルツェンとグラノフスキーが袂を分かつなどさまざまな不一致を抱えていたことは言うまでもない。

私自身は、より混沌とした、したがってより豊かな萌芽が見られる時代として1840年代を捉えている。西欧派やスラヴ派といった括りには集約されない試みを掬いとり、ロマン主義からリアリズムへと向かう過渡期の混沌とした内実を汲みとりたいというのが、私の基本的な問題関心である。

そのための小さな試みとして、本稿では〈夢想家〉(мечтатель)の形象に着目し、その諸相を分析することで、40年代の思想的状況を再確認する。夢想家は40年代の散文にしばしば登場するタイプであり、夢想家をいかに捉え、いかに描くかという点に、それぞれの作者の立ち位置が反映されている。はじめにゴンチャロフの『平凡物語』(1847)の主人公アレクサンドル・アドゥーエフを取りあげ、この〈夢想家〉に対するベリンスキーの評価とその

方向性を明らかにする。ついで、ゲルツェンの『誰の罪か』(1847)に登場するベリトフ、プレシチューエフの『友情ある忠告』(1849)の主人公ロムテフに目を向け、ベリンスキーの示す方向性に沿った夢想家の系譜をたどる。そのうえで、この系譜と対比させる形で、ドストエフスキーの『白夜』(1848)、およびアポロン・グリゴリエフの『ヴィターリン三部作』(1845-1846)を論じ、40年代の文学においてそれぞれの作品が占める特異な位置を明らかにしたい。

1. 西欧派の系譜

ロマン主義の特質の一つとして、芸術と実人生の密着という点をあげることができるだろう。ここで上位に置かれるのは芸術であり、生活は芸術へと高められなければならなかった。たとえば、ヨーロッパ中で流行したバイロニズムは言語表現上の潮流であると同時に、バイロンを模倣する者の実人生を規定するものにほかならなかった。

文学と実人生のロマン主義的關係は、だが、40年代にいたって後景に退くことになる。文壇の主流となったのは自然派の散文作品であり、作者は社会悪をその眼で見て暴く存在となった。暴露者は自ら描く物語の主人公にはなれない。作者が自己を主人公に仕立てあげるロマン主義の作法は、そのリアリティを失いつつあったのである。40年代においてロマン主義者を演じることは、亜流をさらに模倣することにほかならなかった。ロマン主義のナイーヴな模倣者は、『エヴゲニー・オネーギン』におけるレンスキー、『現代の英雄』におけるグルシニツキーといったタイプによってすでに形象化されていたが、この系譜に連なる夢想家をペテルブルクという都市空間に配置して描出したのが、ゴンチャロフの『平凡物語』である。

『平凡物語』は二人の人物の対比からなっている。栄光を夢見て田舎からペテルブルクにやってきたロマンチストのアレクサンドルと、官職につき工場を経営する徹底したリアリストの叔父ピョートルである。アレクサンドルはあらゆる物事をロマン主義の眼鏡を通して見る。

彼は気高い偉業を夢に見、崇高な抱負を心に描きながら、己を新しい世界の市民と思ひなし、堂々たる態度でネフスキー大通りに繰りだしていった……。こうした夢想に包まれて彼は帰宅したのだった。¹

アレクサンドルのナイーヴな情熱は叔父のピョートルにたちまち揶揄され、その夢想は叔父の手でことごとく散文的な日常に引きずりおろされる。

君はきっと夢想家にちがいない。ところがここじゃ夢想している暇なんかない。我々のような連中がここに来るのは仕事をするためなんだ。²

実際、君はあちらに残っていた方がよかったんだ。[……]ところがこちらのやり方

じゃ君は幸せにはなるまい。こちらじゃあちらの考え方をどれもこれもさかさまにする必要があるんでね。³

ピョートルは甥を夢想家と呼び、まるきり正反対の見地にたって甥の勇み足を諭す。その叔父の忠告も甥の熱血を冷ますことはできないが、どのみち彼の夢想は現実を前にしてあえなく破れる定めにある。現実裏切られるたび、アレクサンドルはロマン主義的な様式でもって対処する。たとえば、恋愛に破れたときにはロマン主義的な「幻滅」のモードに則ってふるまう。だが、実生活での経験は確実に夢想家の性格を丸くしていく。最終的にできあがるのは、ごく平凡な一都市住民である。

とはいえ、これをもってピョートルの勝利とするわけにはいかない。ピョートルの生活設計にも家庭の幸福という点で決定的な落とし穴があったことが明らかになるからだ。道徳家ではなく画家をもって任ずるゴンチャロフは、どちらの側に立つこともなく、一定の距離を保ったまま相反する両タイプを描出している。作者がアレクサンドルの裁き手になることはない。彼を裁いたのは批評家のベリンスキーである。

ベリンスキーはボトキン宛ての手紙に『平凡物語』の読後感を書き記している（1847年3月17日付き）。

きっと君だってこの物語に夢中になるだろう。社会にどれほどの利益をもたらすことだろう！ ロマン主義、空想癖、感傷癖、田舎式の旧弊に対する、なんという恐るべき打撃！⁴

ロシアにおけるリアリズム探究の主導者となったベリンスキーは、ロマン主義に対する「恐るべき打撃」をそこに見出した。評論「1847年のロシア文学概観」では、アレクサンドルを俎上に載せてロマン主義批判を展開している。

ベリンスキーによれば、アレクサンドルは空想と幻想の発達した人間である。その幻想のせいで、人は生活の実際的な幸福を享受するよりも、生活の幸福の夢に耽溺することを好むようになる⁵。彼は高揚する自尊心に囚われており、他者には彼のプログラムに則ってふるまうこと、つまり永遠の友情やら献身的な愛やらを求める。アレクサンドルは同じ夢想家タイプの女性と恋愛関係になるが、実際のところ、二人を結びつけているのは自然な愛の感情ではなく、自分の愛についてのおしゃべりにすぎない。

しかし、われらが主人公は心や自然や現実の法則を知ろうとはしなかった。彼はそれらのために自分自身の法則を作りだしたのだ。傲岸にも現に存在する世界を幻影とみなし、己のファンタジーによって生みだした幻影を現実に存在する世界とみなしたのだ。⁶

自分の生みだす幻影の世界に生き、他者にはもっぱら自分の理想の受容者であることを求める夢想家に対し、ベリンスキーは厳しい審判を下す。「理想主義とロマン主義への過度の傾斜は、ほとんどつねに気質の欠如を証明しているのだ。これは無性的な人間であり、あたかも植物の王国にあって孢子で繁殖するキノコのようなものである⁷」。

アレクサンドルはやがて恋愛関係を一方的に破棄するのだが、その際、己の卑小さに対する自覚が心中かすかに芽生える。「この発見はあたかも雷のごとく彼を打ちくいだいた。だが、それによって彼が生活との和解を求め、真実の道を行くことはなかった⁸」。ベリンスキーによれば、アレクサンドルは真実の道へと踏み出すことなく終わった失敗者なのである。

先に引用したポトキン宛ての書簡で、ベリンスキーは、『平凡物語』を社会にとって有益な作品とみなしている。ベリンスキーから見れば、アレクサンドルは反面教師という意義をもつ。この点に関しては、アレクサンドルがオネーギン - ペチョーリンの系譜ではなく、レンスキー - グルシニツキーの系譜に連なる存在であることに着目すべきだろう。時代状況を批判していく際にベリンスキーが主たる参照先としたのは、前者の系譜である。ベリンスキーの観点に立てば、時代の問題を一身に体現しているのは前者であって、後者は 40 年代の問題圏に参与することのない時代に遅れたロマン主義者とみなされるのだ。

では、ベリンスキーの念頭にある「真実の道」とは何なのか。ここで参照すべきは、ベリンスキーによる『現代の英雄』論（1840）だろう。ベリンスキーはペチョーリンのうちに時代の問題を見出し、それに「反省」という用語を与え、「現代の病」として一般化した⁹。ベリンスキーによれば、「反省の状態にあるとき、人間は二つに分裂する。一方は生きている。もう一方は他方を観察し、裁いている¹⁰」。ベリンスキーの捉える「反省」とは、自己分裂の問題、または自己意識の問題としてあった。ロシアとヨーロッパ、理想と現実のあいだで切り裂かれた人間は、自己に向かって自己を問い返しつつけることになる。反省をいかに克服するかという問題は、西欧派・スラヴ派を問わず、40 年代の知識人にとって共通の思想的課題となった。

ベリンスキーは反省を「精神の過渡的な状態」とみなす。「古いものはすべて破壊されたが、新しいものはいまだ生じていない。このとき人間はなにか現実的なものの未来における可能性としてあるのみで、現在においては完全な幻影にすぎない¹¹」。ここで希求される「新しいもの」こそ「現実」にほかならず、「反省」とは「現実」という高次の次元へ至るための過渡期的な状態と捉えられる。反省を経て現実へと参与する道筋を、ベリンスキーは「真実の道」として思い描いていた。これは西欧派の面々が共有する基本的な傾向となった。

『平凡物語』のアレクサンドルは、反省の欠如した夢想家である。彼は自分が夢想家であることを自覚してはいないし、現実破れたあとも傷口を糊塗する論理をすぐに見つけてくる、あるいは傷口さえ新たな夢想の道具となる。それゆえアレクサンドルが反面教師の域を出ることはない。一方アレクサンドルと対照的な位置に立つのが、同年に発表された『誰の罪か』の主人公ベリトフである。

ベリトフはオネーギン - ペチョーリンの系譜に連なる形象であり、のちに〈余計者〉という

総称を与えられるタイプに含まれる。ベリトフの来歴は以下のようなものだ。彼は、理想家肌の母のもと、これまた理想主義者のスイス人を家庭教師として育った（家庭教師は作中で「夢想家」と呼ばれている）。「彼が現実というものを理解しないよう、二人はあらゆることをやってのけた。灰色の世界で起こっていることを、二人はせっせと彼の眼から覆い隠した。生活の苦い面をくわしく教えるかわりに、輝かしい理想を描写してみせた。[……] 二人が育てあげたのは一種の精神的なカスパー・ハウザーだった¹²」。

やがてベリトフは大学を卒業し、高邁な理想に燃えてペテルブルクへと赴く。アレクサンドル・アドゥーエフと同じく、温室育ちの夢想家は溢れんばかりの空想を抱えて勤務地にやって来る。「わが夢想家は喜び勇んでペテルブルクに向かった。活動だ、活動だ!……¹³」。だが、彼の希望や計画はたちまち冷や水を浴びせられる。彼が味わうのは幻滅ばかりである。早々に勤めを辞した彼は、医学やら美術やらと次々に進路を変えていくが、いずれもはかばかしくいかない。夢想家はやがて幻滅と懐疑にむしばまれた余計者となる（余計者という語は用いられていないが）。

アレクサンドルとは異なり、ベリトフは自らの置かれた状況を分析的に捉えることができる。

要するに、力それ自体はおのずから絶え間なく発展して準備万端整えていくのですが、その力が要請されるかどうかは歴史によって決定されるのです。¹⁴

ベリトフによれば、人間の内なる力が現実世界に働き場所を見出しうるかどうかは、ひとえに外的条件にかかっている。個人と社会の間には断絶があり、多くの個人は現実への入り口を見つけない。語り手自身、ベリトフのことを「懐疑に満ちた時代の犠牲者」と呼んでいる。幻滅せる夢想家ベリトフは、ゲルツェンの社会批判に裏打ちされた形象なのである。

このタイプはツルゲーネフの主人公たちに受け継がれていく。『獵人日記』の一篇「シチグロフ郡のハムレット」（1849）において、ツルゲーネフは作中の「ハムレット」にこう語らせる。「私も反省に蝕まれており、直接的なものは影も形もないのです¹⁵」。このハムレットはドイツに留学して哲学を修めたものの、自分はただの模倣者にすぎないのではないかという懐疑に苦しみ、身につけたヨーロッパの知識をロシアの現実に応用できないことに幻滅する。自己の不毛を悟った彼は、そのあげくに道化じみたふるまいをしてみずからを卑しめるようになる。ここに具現されているのは、ピョートル大帝の改革後、インテリゲンツィヤの宿命となった苦悩である。ロシアとヨーロッパ、理想と現実のあいだで引き裂かれた彼らは、自発的な直接性を失い、反省的な自己意識のうちに落ちこんでいくのである。

こうした袋小路をいかに打開するのか。それがベリンスキーやゲルツェンの思想的な課題であり、彼らはその突破口を社会主義的な観点に立った実践的行為に見出していった。たとえばゲルツェンは、『学問におけるディレッタンティズム』（1843）の第四論文「学問における仏教」で、個と普遍、あるいは学問と現実の矛盾的關係について論じている。理性にもとづく抽象的な学問において、具体的な個人の存在は滅却されてしまう。では、いかにして個々

の人格を救いうるのか。ゲルツェンはその答えを「行動」に見出した。社会的・実践的行動によって個人は学問の抽象性から脱却し、「人格のうち個別性と一般性が結合し、市民的相貌のもとに統一される¹⁶」。そのとき学問は思弁的抽象ではなく変革に寄与する行為の哲学となる。

ベリンスキーやゲルツェンの示した方向性に、もっともナイーヴな形で応答したのがプレシチェーフである。プレシチェーフはペトラシェフツィ（ペトラシェフスキー・サークルのメンバーたち）の一人で、ベリンスキーやゲルツェンよりも一回り下の世代に属する。ペトラシェフスキー・サークルは 40 年代に隆盛したサークル文化のいわば代名詞的存在であり、ペテルブルクのペトラシェフスキー宅には多くの青年知識人たちが出入りしていた。プレシチェーフは、彼らの理想を代弁する詩人としてサークルの中心に座していた。

プレシチェーフの創作活動の中心にあったのは詩である。詳しくは別稿にゆずるが、抒情詩人として出発した彼は、しだいに「わたし」の心情ではなく「われら」の連帯を歌う詩人へと変貌していき、やがてサークル内のアジテーターという「実践」的な役割に徹するようになる。それが 40 年代の傾向に対する彼なりの応答だったのである。

小説家としてのプレシチェーフは、「自然派」の作家に数えられる。その作品は、フェリエトン風の軽妙な筆致で富裕層の軽薄な暮らしぶりを暴露し、揶揄するものが多い。たとえば、「アライグマの毛皮外套」（1847）や「巻き煙草」（1848）は、いずれも妻の不貞をめぐるドタバタをシニカルに描いている。1849 年に発表された中篇「友情ある忠告」は、彼の小説のうち最もまとまりのよい作品のひとつで、やはり軽いシニカルな筆致で夢想家の恋の顛末を描いている。主人公のロムテフは偶然見かけた令嬢に恋心を抱くが、夢にふけて生きてきたために何をすべきか皆目わからない。そこで友人のオコリョーシンに相談する。彼は遊び人タイプの実際家で、友人に軽薄な助言を与える。一方、彼は彼で結婚を間近に控えている。その相手は自分が財政難を救ってあげた家の令嬢である。この令嬢こそ実はロムテフの想い人で、二人はたがいに惹かれあいつつもついに結ばれることはない。令嬢はオコリョーシンのもとに嫁ぎ、ロムテフは田舎にひきこもって安穏と暮らす。

ゲルツェンの描くベリトフが 40 年代人の自画像としてあるのに対し、プレシチェーフはロムテフを徹頭徹尾「他者」として描いている。ロムテフはアレクサンドル・アドゥーフに似たナイーヴなロマンチストだが、アレクサンドルとは異なり、その怠惰と従順が強調されている。

ヴァシーリー・ミハイロヴィチ・ロムテフは二十三歳だった。孤独で怠惰な、夢見がちな生活を送っていた。[……] 大体がヴァシーリー・ミハイロヴィチは夢想することが大好きで、自分の時間の大部分は夢見るうちに流れすぎていくのだった。¹⁷

彼の夢見る理想は家庭の幸福の情景であり、アレクサンドルやベリトフに比べ、その規模の小ささは歴然としている。ロムテフは、先行する夢想家よりも一回りも二回りも卑小な夢想家と

いえる。

ヒロインの結婚は家の財政的な理由によるもので、これは40年代に流行したジョルジュ・サンド的設定である。西欧派の知識人たちにとっては「家父長制上の合法的な売春」として最も忌むべき事態であるはずだが、この事態を前にしてロムテフは何一つ有効な手立てを打つことができない。失恋は彼の心にそれなりの傷を負わせるが、田舎に移った彼は早くも現実と折りあってそれなりの幸福を手に入れる。現実における無能力と現実に対する従順。それが夢想家ロムテフの特性である。

実践家たらんとするプレシチュエーフが夢想家を他者として描いたのは当然のことだ。彼はここで、ペトラシェフツィの対極にあるべき反面教師を提示しているのである。一方で、そこにプレシチュエーフの隠れた屈折を読み取ることもできるだろう。夢想家を揶揄する立場に身を置くことで、プレシチュエーフは実践家としての自己を確認したかったのかもしれない。素朴な理想主義者という批判は、「進め！ 恐れも迷いもなく」と歌う彼自身にも常について回るものだったからだ。彼の詩は同志を实践へとうながす呼びかけであって、詩作それ自体は目指すべき実践ではない。やがて彼は発禁の書の翻訳に取り組み、さらにはモスクワに赴いて学生たちを相手にプロパガンダ活動を行うことになる。

以上のように、西欧派の作家たちは「現実」の探求という観点から夢想家を捉えた。反面教師としての夢想家を提示することで現実への実践をうながし、あるいは夢想家が余計者になるさまを描いて個人と社会の断絶をあらわにしてみせた。

2. ドストエフスキーの夢想家

プレシチュエーフの「友情ある忠告」はドストエフスキーに捧げられている。一方のドストエフスキーも、ほぼ同時期に書いた「白夜」をプレシチュエーフに捧げている。二人はともにペトラシェフスキー・サークルのメンバーであり、親友でもあった。二人が創作をめぐる言葉を交わしたことは容易に想像できる。事実、「白夜」と「友情ある忠告」はともに似たタイプの夢想家を主人公とし、その恋愛と三角関係を描いている。「白夜」の主人公も、部屋の隅に引きこもって果てしない夢に感溺している。ベリトフやアレクサンドルとは異なり、彼が夢見るのは現実の社会でこれから成し遂げるべき偉業ではない。その夢世界はロムテフに比べればはるかに壮大だが、やはりロマン主義小説の主人公となって冒険と恋愛の世界に生きることを夢見ている。

しかし、夢想家の描出手法、夢想家と夢の関係といった点で両者は著しく異なっている。ドストエフスキーの夢想家は、たんにプレシチュエーフとの相違というにとどまらず、40年代にあって独自の位置を占めている。第一節で取りあげた作品群との本質的な相違は、主として以下の三点にまとめられるだろう。

第一に、「白夜」は夢想家の「私」による一人称の小説である。「私」は自らを夢想家として定義してみせる。

夢想家というのは——詳しい定義が必要なら言いますけれど——人間じゃなくて、いいですか、なにか中性的な存在なんですよ。¹⁸

ここには自己に対するアイロニカルなまなざしがある。「なにか中性的な存在」(«какое-то существо среднего рода»)という自己評価は、ベリンスキーがアレクサンドル・アドゥーエフのタイプを「無性的人間」(«бесполое люди»)と評したことを踏まえているとも考えられる。だが、ここに提示されているのは、夢想家にとっての夢想家であって、作者にとっての夢想家ではない。語る「私」と語られる「私」の関係はあっても、作者と「私」の関係はテキスト内に仮構されていない。

ここに第二の相違点がある。第一節で取りあげた作品群はいずれも作者(ないしは語り手)と夢想家の距離を前提としていた。夢想家は他者として揶揄され、または同時代のタイプとして分析的に提示されており、そこには作者の思想的立場が反映されていた。それに対し、「白夜」では、作者の側にあるイデオロギーを読み取ることはできない。作中には夢想家がみずから夢想家の生活を批判し、生き生きとした現実生活への渴望を口にする箇所がある¹⁹。だが、ここでいう現実とは、生きた堅牢な生活として、もろくはかない夢想に対置されるものであり、夢想によって粉飾された観念というにすぎず、いわば夢想の一部といってよい。作者と「私」の距離が仮構されていない以上、夢と現実の断絶に社会的な問題を読みこもうとする西欧派的傾向は見出せないのである。この点でドストエフスキーは、ベリンスキーやゲルツェンらとは大きく異なっている。

第三に、「白夜」の主人公にとって、〈夢想家〉とは反省的な自己定義であると同時に、意識的な自己造型でもある。夢想家は現実世界との交通を完全に断ち切っているわけではない。彼は自分が役所勤めの人間であることをほのめかしている²⁰。だが、仕事についてはそれ以上触れることはない。彼はもっぱら夢想家としての自己について語るのだ。彼にとって自己は何より先に夢想家としてあり、勤め人としての自己を意識の閥の外に追いやることでみずから夢想家となっているのである。

彼にとって、夢想の世界は灰色の現実からの逃避先として豊饒な内実をそなえている。

[……] 夢想家は何も望みません、だって欲求を超越しているんですから。彼にはすべてがあるんです、満足してるんです。彼は自分自身の生活の芸術家であり、どんなときにもそれを思うがままに創り出せるんですから。それに、このおとぎ話みたいな空想の世界ときたら、いとも簡単に、自然につくれてしまうんですよ！ とても幻とは思えないくらい！ 実際、ときには信じたくなるんです。こうした生活が感覚の興奮でも蜃気楼でも絵空事でもなくて、それこそ正真正銘、現実存在するものなんだとね！²¹

夢想家であることを反省的に問い返しながらも、主人公はみずから夢想家であることを選択する。ナースチェンカとの出会いは、夢想と現実の境界域で起こった出来事といえるが、主人公はこの出会いを現実の方へ推し進めることをしない。ナースチェンカは帰還した恋人とともに現実の生活へと去っていき、主人公は夢想の世界にとどまる。ナースチェンカの思い出は追想の対象と化し、夢想の新たな主題となる。彼はナースチェンカにこう告白していた。「いいですか、僕はいまね、ある一定の時期に、かつて自分なりに幸せだった場所を思い返しては訪ねてみるのが好きなんです。二度と帰らぬ過去と調和しながら自分の現在をうち建てるのが好きなんです²²」。ナースチェンカとの邂逅も、いまや想起によって訪れるべき幸福の場所となったのだ。「白夜」というテキスト自体が、そうして回顧的に反芻され語り直された物語なのである。

興味深いことに、「白夜」の書かれた時期は二月革命勃発を受けてペトラシェフツィの一部が急進化していた時期にあたる。ドストエフスキーもまたスペシネフを頭目とする秘密結社に加わることになる。現実のドストエフスキーは千年王国論的な革命の夢に参与していくわけだが、その彼が描いたのは退行的な空想の世界にとどまる夢想家なのだった。ここにドストエフスキー自身の何らかの屈折を読み取ることもできようが、ここでは次の点を確認してこの節を結びたい。作家ドストエフスキーは夢想家の「魂の深み」をそのままに提示してみせたのであり、それゆえに40年代の文学において特異な場所を占めているのである。

3. アポロン・グリゴリエフの夢想家

アポロン・グリゴリエフの思想的遍歴は、40年代の混沌とした思想的状況をそのまま体现しているかのようだ。正教、ドイツ観念論（とくにシェリングとヘーゲル）、神秘思想（バームやトマス・ア・ケンピスなど）、ユートピア社会主義（ジョルジュ・サンドやフーリエ）。グリゴリエフはあらゆる思想に餓えたように飛びつきながら、結局そのいずれにも安住することができなかった（ただしシェリングの影響は持続的だった）。さらにはフリーメイソンに入会し、ペトラシェフスキー・サークルにも出入りするのだが、いずれも遍歴の一時的な滞在地点というにすぎなかった。

グリゴリエフの創作の出発点には、自身の決定的な、破滅的な二度の恋愛体験がある。この体験を時代の問題として捉え直すことがグリゴリエフの一つの課題だった。グリゴリエフの分身ヴィターリンを主人公とする三部作（「未来の人間」「私がヴィターリンと知り合った話」「オフィーリア——ヴィターリンの回想より」）は、まさにその課題と向きあった作品といつてよい。

ヴィターリンもまた反省的な自己意識に囚われた夢想家である。

僕は愛と人生をむなしく待っていた——自分の檻に閉じこめられていたのだ。
そして十五の歳にはすでに空虚と飽食に苦しんでいた。幻想の生活のせいで、

力が衰弱していたのだ。

人間の負い目について考えるように、欠乏という考えが否応なく浮かんできたのはその頃だった。全人生は、欠乏の長い鎖のようにみえた。肉体的飽食あるいは精神的飽食が行きつく先はそんなところだ。僕は夢想家になった [……]。²³

実際、早くに始まった思想生活のせいで私の心は老いてしまった。とっくの昔に空想によって蒙を啓かれた私が、現実を持ち込むのは倦怠と退屈ばかりだ……。²⁴

ヴィターリンは幼くして夢想のうちに人生を味わいつくしたために、早くも現実に対する不感症に陥っている。現実と出会ったところで彼は自らの無能力をさらけだすほかなく、彼の恋愛が現実世界に場所を得ることはない。

ヴィターリンの自己分析はペチョーリンの独白を踏まえている。

ごく若いころ、私は夢想家だった。[……] 私がこの人生へと踏みだしたのは、人生を頭のなかで経験しつくした後のことで、だからすっかり退屈でやりきれなくなってしまう。とっくの昔に知っている本の、くそおもしろくもない模倣を読んでいるようだった。²⁵

ヴィターリンもまたオネーギン - ペチョーリンの系譜に連なる形象といってよい。だが、社会主義的な観点に立つベリンスキーやゲルツェンが「反省から実践へ」という道筋を描くのに対し、グリゴリエフが問題とするのは夢想家の内なる空虚そのものだ。

無感動が彼らのうちに居座っているのは、現実生活と戦っているうちに力が枯渇してしまったからではない。そうではなくて、彼らの力は幻想との戦いのなかで滅びてしまったのだ。彼らもちゃんとわかっている。幻想によって自らを苛み、猛威をふるう夢想によって自らを衰弱させているということは [……]。²⁶

ヴィターリンは、夢想の害悪を自覚しながらも、惰性から夢想の世界にとどまりつづける。この点でヴィターリンは、「白夜」の夢想家とも対立している。後者にとって、空想の世界はいまだ現実の代替物となりうるだけの豊饒さを有している。ところがヴィターリンは、夢想自体にうんざりしており、その心には無感動が巣食っている。

ここには、同時代の状況に対するグリゴリエフのニヒリスティックな応答がある。ヴィターリンは「真理」を「遠近法」と看破する。

万人にとっての真理は——往々にして一人の人間にとって欺瞞なのだ。誰か一人がすでに欺瞞と受け取っているなら、その欺瞞性がいずれ多くの人に暴露される時

がくるに違いない……。欺瞞！ しかし、満月のかげやきの下で、僕たちの前に据えられる遠近法は——和解と祈りの時間を与え、魂を晴れやかにも自由にもしてかれる遠近法は、どれもこれも欺瞞ではないのか……。²⁷

グリゴリエフは、西欧派の希求する「現実」も、スラヴ派の唱える教会との合一も信ずることができなかった。彼が見つめていたのは全体的な真理に回収されえない己の人格である。ヴィターリンは己自身の「生命を花開かせることのできる国²⁸」を求めて孤独な探求に乗りだすことになる（ヴィターリンの名はラテン語の *vita*（生命）に由来する）。

過去に作られた所与のものに圧迫された僕らは、この所与のものに向こうに、自身を求め、自分自身の義務と道徳の観念を求め、自分自身の人生観を求め、終わらざる不毛な探索へと乗りだす定めにあるのだ。²⁹

グリゴリエフは、西欧派にもスラヴ派にも属することなく、時代の混沌を見つめながら己自身の立脚点を模索していった。グリゴリエフの描く夢想家は、40年代の思想的状況に対する特異な応答として異彩を放っている。

おわりに

前述したように、ロシア文学史において40年代は詩から散文への過渡期として捉えられてきた。だが、むしろ詩から批評への転換と見るべきなのかもしれない。40年代の散文は、小説であれフェリエトンであれ評論であれ、同時代の状況に対する直接的な異議申し立てとしてあり、作者の思想的立場を明確に前提としているからだ。

西欧派の提示する夢想家は、彼らの希求していたリアリズムの観点から描かれており、そこには彼ら自身の社会批判が投影されていた。一方アポロン・グリゴリエフは、40年代の混沌とした思想的状況を見つめ、そこに生きる個人の内面の空虚を問題化した。所与の観点を選び取ることのできなかったグリゴリエフは、その空虚のなかで己自身の立脚点を模索していった。それに対しドストエフスキーは、こうした構図から逸脱している。「白夜」の夢想家は、作者の観点の提示としてあるのではない。ドストエフスキーが描出したのは、夢想家にとっての夢想家であり、作者の批評的観点は前提とされていない。これは批評の花開いた時代にあってきわめて特異なことといえるだろう。

注

1. *И.А. Гончаров*. Полное собрание сочинений и писем в двадцати томах. Т. 1. СПб., 1997. С. 206. 以下、外国語文献の引用はすべて拙訳を用いる。
2. *И.А. Гончаров*. Полное собрание сочинений и писем в двадцати томах. Т. 1. С. 209.
3. *И.А. Гончаров*. Полное собрание сочинений и писем в двадцати томах. Т. 1. С. 209.
4. *Белинский В.Г.* Полное собрание сочинений. Т. 12. М., 1954. С. 352.
5. *Белинский В.Г.* Полное собрание сочинений. Т. 10. М., 1956. С. 332.
6. *Белинский В.Г.* Полное собрание сочинений. Т. 10. С. 339.
7. *Белинский В.Г.* Полное собрание сочинений. Т. 10. С. 339.
8. *Белинский В.Г.* Полное собрание сочинений. Т. 10. С. 340.
9. ベリンスキーはこの用語をドイツ観念論から借りたと考えられるが、ドイツ観念論における認識論的、あるいは存在論的な射程は無視している。むしろ、ベリンスキーが連なるのはルソーにはじまる反省批判の系譜である。
10. *Белинский В.Г.* Полное собрание сочинений. Т. 4. М., 1954. С. 253. ベリンスキーは、ペチョーリンのセリフの一節「僕の中には二人の人間がいてね。一方は語の完全な意味で生きています。もう一方は思索にふけり、他方を裁いているんです」(*Лермонтов М.Ю.* Полное собрание сочинений в 10 томах. Т. 6. М., 2000. С. 341.) をほとんどそのままに借用しているが、「分裂する」という言葉を補い、「思索する」を「観察する」に替えている。
11. *Белинский В.Г.* Полное собрание сочинений. Т. 4. С. 253.
12. *Герцен А.И.* Собрание сочинений в тридцати томах. Т. 4. М., 1955. С. 92.
13. *Герцен А.И.* Собрание сочинений в тридцати томах. Т. 4. С. 94.
14. *Герцен А.И.* Собрание сочинений в тридцати томах. Т. 4. С. 168.
15. *Тургенев И.С.* Полное собрание сочинений и писем в 28 томах. Т. 4. М., Л., 1963. С. 279.
16. *Герцен А.И.* Собрание сочинений в тридцати томах. Т. 3. М., 1954. С. 76.
17. *Плещеев А.Н.* Житейские сцены. М., 1986. С. 21-22.
18. *Достоевский Ф.М.* Полное собрание сочинений в 30-ти томах. Т. 2. Л. 1972. С. 112.
19. *Достоевский Ф.М.* Полное собрание сочинений в 30-ти томах. Т. 2. С. 118.
20. *Достоевский Ф.М.* Полное собрание сочинений в 30-ти томах. Т. 2. С. 114. 夢想家は一日の好きな時間として、仕事を終えて家路につく時間をあげている。
21. *Достоевский Ф.М.* Полное собрание сочинений в 30-ти томах. Т. 2. С. 116.
22. *Достоевский Ф.М.* Полное собрание сочинений в 30-ти томах. Т. 2. С. 119.
23. *Григорьев А.А.* Сочинения в двух томах. Т. 1. М., 1990. С. 310. グリゴリエフの全集はいまだ刊行されていない。スピリドノフによる全集は第一巻(1918)のみで頓挫しており、サヴォードニクによる14巻著作集(1915-1916)も一冊あたりの収録数が少ないため網羅的ではない。本稿ではエゴロフが校訂した二巻本の著作集を底本とする。
24. *Григорьев А.А.* Сочинения в двух томах. Т. 1. С. 296.
25. *Лермонтов М.Ю.* Полное собрание сочинений в 10 томах. Т. 6. С. 362.
26. *Григорьев А.А.* Сочинения в двух томах. Т. 1. С. 260.
27. *Григорьев А.А.* Сочинения в двух томах. Т. 1. С. 269.

28. Григорьев А.А. Сочинения в двух томах. Т. 1. С. 262.

29. Григорьев А.А. Сочинения в двух томах. Т. 1. С. 269.